

「念仏三昧詩集序」について

佐藤心岳

「念仏三昧詩集序」は、廬山の慧遠によって書かれたものである。

慧遠は、俗姓を賈氏といい、雁門樓煩（山西省崞県）の人で、東晋の咸和九年（三三四）に生まれ、義熙十二年（四一六）に八十三歳で没した。かれは十三歳のときに許・洛地方（河南省）に遊学し、博く六経に通じて、『老莊』を最も善くしたという。二十一歳になると、かれは太行恒山（山西省渾源県）に入り、釈道安について『般若経』の講説を聞き、割然として悟るところがあつて、弟の慧持とともに落髮して弟子となり、日夜精励してその教えを受けた。

ついで、慧遠は、同学四百余人とともに、道安について襄陽（湖北省襄陽県）へ行ったが、前秦の建元十五年（三七九）に襄陽が苻堅の軍によって陥れられると、道安と別れて、弟子数十人とともに荊州（湖北省江陵県）におもむき、東晋の太元六年（三八二）には廬山（江西省九江県南）に入つて、竜泉精舎に止まった。ときに、江州刺史の桓伊は山東に東林精

舎を建てて、これを慧遠に寄進したので、慧遠はここに住して、寺内に禪林を置き、龕室を築いて仏影を図写し、また、武昌（湖北省武昌県）から阿育王像を迎えてこれを安置し、日夜ひとびとを率いて、もっぱら仏道の修行につとめた。

慧遠は、道安のあとをうけて東晋の仏教界の最高指導者として仰がれるようになったが、かれは、廬山においては、襄陽において道安から般若学や禅観の教えをうけたとき以上に、複雑な要素を受容しなければならなかった。そのひとつは、道安が長安へ去つてから新しく伝えられた小乗阿毘曇教学の受容であり、また、クマールージーヴァ (Kumārasiiva 鳩摩羅什) とその門下を通してのナーガールジュナ (Nāgārjuna 龍樹) 系の大乗仏教の受容であり、さらに、クマールージーヴァの教団と対立して、長安から擯出されてきたブッダバドラ (Buddhabhadra 仏陀跋陀羅) の禅観教学の受容などである。

慧遠は、仏典の講説をおこなうときに、最初にかならず「三世因果応報」の教えを説いたと伝えられているが、かれ

は實際にどのような宗教思想をもっていたのであろうか。これについては一口に論じることができないが、ここではとくに「念仏三昧詩集序」を取り上げて、その内容にもとづいて、かれの宗教思想の核心の一端に触れてみようとおもう。

その宗教思想の理解を容易にするために、まずここに「念仏三昧詩集序」の現代語訳を掲げてみよう。

序文にいう、いったい三昧というのは何であるか。それは専思寂想のことである。思いがもつぱらひとつである、心は統一して分散することはない。思いがしずかであると、気はしずま^{はたま}って心はずみき^{はたま}ってくる。気がしずまれば、智はその照を^{はたま}しずかにし、心がすみき^{はたま}ってくれば、幽微な真理に透徹しないことはない。この二つは、自然の玄符であって、ひとつになつてはたらきをなすのである。それゆえに、心をやすらかにしてつしみぶかくすると、外界に存在するものに感応して、宇宙の靈妙なはたらきに通じ、心を正しく制御して、心のはたらきはかならず微細なところにまで入るのである。これは、修行によつて心を統一し、功德を積み重ねて、本性を変えたからである。なおまた、かたしろのようにじつと動かないで、心と真理とを冥合せ、智は宇宙にとけこみ、期せずして大いなる道をふむ者のごときはなおさらのことである。その初歩的なことについて述べてみたいとおもう。

菩薩が初めて修行の階位にのぼり、はじめて玄妙なさと

の門をうかがうときは、本体は空寂にして、たとえ為さなくともなさないことはなく、その神通変化に及ぶと、長短の常識的な尺度を改めて、大きいのとこまかいのとを互いにあい違わしめている。日、月、星辰は光りをめぐらして照らし、天地をも巻きちぢめて、懐に入れることができる。また、もろもろの三昧というのは、その名がひじょうに多いけれども、それらのうちで、最も功德があつて実行しやすいのは、念仏三昧である。何となれば、玄妙で空寂の道をきわめて、如来と尊称される人は、宇宙の神妙な理法を体得して、あらゆる変化に順応することができて、かならずしも一定の方法をもつてしないからである。それゆえに、この禪定に入るものは、昧然として分別知を忘れ、対象に即してそのすがたを照らし出すことができる。もしも心のはたらきが明らかになれば、心のひかりは輝きあつて、万物のすがたがあらわれ、目や耳のおよばないところにおいても見たり聞いたりすることができ

る。ここにいて、かのふかくたたえて塵ひとつない鏡のすがたを見れば、心霊の根源は湛然として一つであり、清明自然であることを悟り、玄妙な声の心をつつのを聞けば、煩惱はつねに消えて、心の迷いは融け去ってさっぱりとした気分になる。天下のきわめて妙なるものでなければ、どうしてよくこのようになることができようか。これによつて観るなら

ば、念仏三昧は、久しく習慣づけられていた煩惱をなくして、無智な人びとの心に重くのしかかっている迷いをとりはらうことができる。もしもこれを種々さまざまな精神統一の対象と比べれば、もとよりその優劣を語るができないことを充分に知るべきである。したがって、仏教を信奉する人びとは、みな同道のちぎりを考えることを、時間がはかなく過ぎ去って行くことを感じて、来世のための功德をいまになっても積んでいないことを恐れるべきである。

ここにおいて、法堂において心を洗い、襟を正して清らかなり、夜分には寝ることを忘れて、朝早くから夜おそくまで仏道の修行にとめる。そうなれば、まごころをもって仏道の修行につとめはげんだ功德によって、三乗の心に通じ、彼岸への渡し場で生きとし生けるものを救済して、仏縁につながるすべての人びととともに往生することができるようになるであろう。仰いでは、すぐれた足をもっている人いっしょに引っぱって行ってもらい、俯しては、足の弱い人を引っぱって後について行かせたいのである。これによって観るならば、ここに書かれた多くの作品は、ただの文章や詩歌ではないことがわかるであろう。

これによって、われわれは、慧遠の宗教思想がどのような性格のものであり、ひいてはその宗教思想の核心がどのようなものであったかという如実に知ることができる。

慧遠は、師の道安の仏教を継承したが、師の没後、廬山において説一切有部派の小乗教学を伝承し宣布するサンガデーヴァ (Sāṅghadeva 僧伽提婆) を迎えてその教えをうけた。しかしその直後にまた、かれは、説一切有部系の小乗仏教学は仏陀の正しい教えではないと批判し教示するクマールージーヴァの教えに接した。中国人の仏教学は、たえずインドや中央アジアから渡来する仏教学者と仏典とによって修正されなければならなかった。したがって、慧遠の仏教学もまた、必然的に西方から伝来する人師と聖典との権威によって修正されなければならぬ立場におかれた。道安は大乗と小乗とを明確に分けなかったが、慧遠は、クマールージーヴァの教えを受けてから大乗と小乗とを分けて、大乗優越の仏教の方向へ進んでいった。

このような立場におかれた慧遠は、廬山に僧俗の英俊を集めて、国家権力の外に超然として、方外に道を味わり逸民的な態度を堅持していた。庾冰や桓玄が、政治権力によって佛教教団を支配し、僧衆を淘汰し、沙門に王者を拜せしめようとしたときに、慧遠は、それに真つ向から反対して、「沙門は塵外の人なり、敬を王者に致すべからず」といって、『沙門不敬王者論』五篇を著わした。かれは終始この態度を押し通したが、廬山の仏教は微動だもしなかった。これは、沙門の態度としてはきわめて当然のことであると称讃された。そ

の後、漢族国家では、沙門は久しくこの態度を堅持して、官権や君権に屈するようなことはなかった。かくして、仏教の信奉は朝廷や貴族の間でますます盛んになっていった。

ところで、慧遠は、政治権力に対してどうしてこのような確乎たる態度をとることができたのであろうか。それは、かれが仏教の根本真理をしっかりと把握していたからである。これについては、かれが「念仏三昧詩集序」のなかに「かのふかくたたえて塵ひとつない鏡のすがたを見れば、心霊の根源は湛然として一つであり、清明自然であることを悟り、玄妙な声の心をうつつのを聞けば、煩惱はつねに消えて、心の迷いは融け去ってさっぱりとした気分になる」と述べていることによっても明らかである。

慧遠は、東晋の元興元年（四〇二）七月に劉遺民や雷次宗らおよそ百二十三人とともに廬山の般若台精舎の阿弥陀仏像の前において齋を始め、誓いを立てて、ともに西方を期して念仏三昧を修した。これがいわゆる廬山の「白蓮社」と呼ばれる結社念仏の始まりである。ときに、劉遺民はその誓文をつくり、また各詩を賦して浄土を讃嘆した。これは『念仏三昧詩集』と名づけられたが、慧遠がこの序文として書いたものが、ここに現代語訳をした「念仏三昧詩集序」である。

慧遠は、師の道安が安世高系の小乗經典にもとづいて禪觀の実践をおこなったのに対して、大乘經典である『般舟三昧

經』にもとづいて見仏のための精神統一をおこなった。かれは、廬山の般若台精舎の阿弥陀仏念仏によって見仏し聞法することを期し、また、クマーラージュヴァに対して仏の不滅の法身とその現実帰依者への応現教化に關して、質疑を熱心にくり返した。また、かれは、釈迦牟尼仏が千五百歳ののちまで、その現身を留めておられるという仏影窟における感應靈驗をすなおに信受し、それに感動して、みずからもこのような窟で釈迦牟尼仏の感應を得て、見仏し聞法することを期していた。

また、慧遠は、徹底して世俗に媚びへつらうことがなかった。かれは自己の宗教的信念にもとづいてすぐれた宗教者として堂々と人生を生き抜いた。この点において、かれは中国仏教史上においてきわめて特異な存在であった。

このようにして、慧遠は、廬山に「白蓮社」を結んで、人びととともに念仏三昧を嚴修した。そうして、中国の浄土教は、これを契機としてにわかに勃興し、その宗教的感化は、はるか後世にまで及んだ。いずれにしても、慧遠は、「念仏三昧詩集序」のなかで、仏道の修行において最も重要なものは精神統一（念仏三昧）であることをひじょうに力強く明言しているが、これは、慧遠の宗教思想の核心を理解するうえにおいてとくに注目すべきことであるといわなければならぬ。（註は省略）

（仏教大学助教授）